



### 王禅寺ふるさと公園

——三月芽吹きのころ——

この公園は、禅寺丸柿の原木で有名な王禅寺境内に隣接している。住宅地とバス通りの喧騒から一歩入ると、多摩丘陵の自然のなか、十万mを超える小高い台地が広がる。大きな多目的広場を中心に、周囲には遊歩道や林の中には木道も整備され、富士山を望む展望広場や斜面には大きな岩に沿って川も流れている。

三月の下旬、早咲きの玉縄桜が満開の広場では、近くの幼稚園保育園児たちがのびのびと走り回り、遊歩道にはジョギングや犬の散歩をする人々、車椅子のお年寄りも散策を楽しんでいる。ベビーカーに乳幼児を乗せた母親たちも芝生でピクニック気分ようだ。多摩川をイメージして造られた川では、夏になると水遊びをする子ども達も見られる。

川崎市制六〇周年を記念して、当初この地に噴水を囲むフランス式庭園が計画されたが、もつと自然の美しさを生かした公園にしようと、当時の市会議員や地元有志が奔走し実現したと聞いている。この「王禅寺ふるさと公園」の名称は市民公募で決まったそうだ。キーワードはまさに故郷である。

かつての高度経済成長のもと、川崎の発展も、北海道から九州沖縄にわたる各地の故郷を後にしてきた多くの人々によって支えられてきた。その人々が、故郷の原風景を求めて仕事で疲れた心と体で、ふるさと公園に佇むと、この広大な多摩丘陵に再現された水と緑、青い空と白い雲が、優しくリフレッシュしてくれるのである。

ここは、幼児から高齢者までいつでもだれでも遊べる、麻生にとつて貴重な公園なのだ。

絵と文 小田島寛

からむし六十二号の  
ラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介

今号は美術工芸部門の小田島寛さんによる「王禅寺ふるさと公園」です。

P2 菅原敬子会長から、新しい年度の文化協会活動へのメッセージです。

P3 笠原秋水笠原道汀先生に「書道二人展の集大成」と題して寄稿していただきました。

P4 科学者であり、画家でもある佐藤勝昭さんに「文化協会と私」科学と文化をつなぐ」を寄稿していただきました。

P5 平成二十九年総会の報告です。文化祭奨励賞は白井爽風さん、橋本周さんに、文化振興賞が千坂隆男さんに授与されました。

P6 「アルテリッカ新ゆり美術展二〇二七」の紹介です。

P7 恒例のアカデミー部主催の雑学教室「ギリシヤバルテノン神殿の彫刻」と「あさお古風七草粥の会」の報告です。

P8 会員の活動のページ  
美術工芸部の写真の仲間による「第三回あさお写真会」と「陶芸人形二人展」(岩田さん)を紹介します。

# 「あたらしい風と創造」

## 「ここに吹くそよ風」

会長 菅原敬子

そよ風は心地よく、心癒される風、明日に踏み出す力をたくわえさせてくれる風。

文化協会創立三十周年を迎えた平成二十六年「あたらしい風と創造」をきっかけに四年目を迎えました。

この間、顧問や専門委員の方々に貴重なアドバイスを頂いたことは文化協会にとって大事な宝物です。

会員はじめ各団体の方々もめざす方向を意識し、心にとどめ、企画にあたってそれぞれの活動に、少しでも新しい風をとり入れようと努力してくだされたことは、また何よりうれしい成果だといえます。

意識を改革すること、発想を変へることは一般的には大変取組みにくいことであり、具体化はもっと難しいことでもあり、大きなエネルギーがいります。各団体個人が進めてくださること、大きな変化でなくとも創造に向かつての「歩」であったことは確実に。

「あたらしい風と創造」にようやくみんなが向いてきました。スタートに立ったばかり。麻生区が文化薫る街ならばそれにふさわしい風を麻生区内

をはじめ、外に向けても吹かせたいものです。

◆三月六日(月)～十二日(日)まで新百合21ホールにおいて「川崎しんゆり芸術祭二〇一七」を催しました。第八回目です。

千六百名を超える方々が見に来て下さいました。

麻生が発信している芸術力の強さとすばらしさに感動したとお声をたくさんいただきました。

この美術展に参加くださった方は、麻生区美術家協会二十三名、文化協会三十八名、民藝の女優さんを描くデッサン会十四名です。どの作品も自信作を出品して下さいました。いけ花のように協力して仕上げた大作もあり圧巻でした。会場内はオーラが感じられる芸術力にみちた空間でした。

多くの人の心を動かしたこの美術展には麻生区外からもたくさん観に来て下さいましたし、観てくださった方々の評価は高いものでした。

「あたらしい風と創造」の中身を具体的に感じていただけたと思うので

す。

来年はぜひ、麻生の多くの子どもたちにも「わが街」の誇りと芸術力を感じてもらえるように手をつくしていこうではありませんか。

また、連携大学の学生の作品もホワイエ等に展示したいものです。



◆私たちの活動の大きな部分を占めている文化祭。私たちだけでなく大学や外国の方々にも舞台を開放したいものです。

日本の文化を観ていただくとともに、その国の文化の一端を見せてもらうことにより交流をはかれるのではないのでしょうか。

サロン部が企画した連携大学の展示や交流は、新しい窓口となった取組みだと思えます。なんとか定着させたものです。

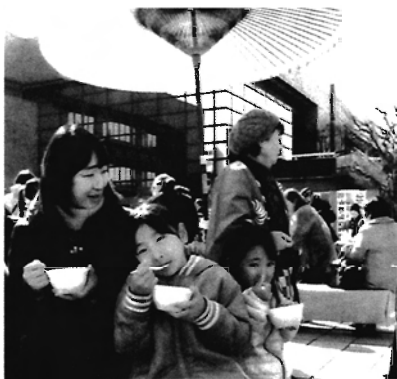


### ◆二〇二〇年東京オリンピック

この機に際し、私たちの地域の文化を広める取組みについても考えてみましょう。

日本の伝統的な文化の七草粥の会に外国の方々に参加を呼びかけ一緒に楽しんでもらえるイベントにできないだろうか。

日本の正月を知ってもらおうこと、そしてともに楽しんでいただいている様



子を国内外にネットを通して発信することも「ローカルからグローバル」への「歩」につながるのではないかと思うので

また、「夏休み親子教室」にも国際交流の位置づけができるのではと考えますが。

折角のオリンピックの盛り上りを使わない手はない。私たちも楽しむと共に、麻生区や近隣に住んでいる外国の方や留学生等へも積極的に働きかけてみてはどうでしょうか。

### ◆会員の高齢化、会員を増やす取組み

麻生区の高齢化率は川崎市で二番

目に高く、活躍くださったたり多額のご寄付をくださった会員が退会やお亡くなりになり、大きな穴があいたように思えてなりません。このような状況は七区で構成している川崎市総合文化団体連絡会(総文連)に共通した課題でもあります。

しかし、二十八年度はみなさまのご協力で会員・団体会員が増え感謝するところ

アルテリッカ美術展を観て、「どうしたらこの会に入れますか」との問合せもありました。

「あたらしい風と創造」も、まず身近なところからの一歩。誰でも入りやすく親しみを感じていただけるよう、

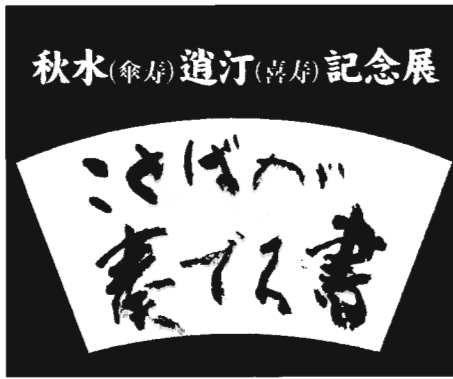
門戸を広げていきたいと思います。

# 秋水(傘寿) 道汀(喜寿) 記念展 「ことばが奏でる書」

専門委員 笠原恒子

平成二十九年五月三十一日(水)～六月五日(月)

ミューザ川崎 四階企画展示室



毎年ながら年が明けると二人に誕生日が来ます。一昨年その頃に、「寿が二人重なるなんてとびきりの佳い年だ。最初で最後の二人展をやるう。」と彼から提案がありました。私も同じ思いでおりましたから、意気投合。人生最後の締めくくりのつもりで話は決まったが、月刊書道誌の編集に明け暮れて、月の半分近く机に向かい切りの秋水が果たして出来るのか。若手教員に囲

まれた月例の国語教育実践指導の講師、日本国語教育学会の理事として川崎地区の発表会等々。さらに書団凌雲社副会長の任務、秋水会の行事、書展の準備など電話やお願いやら、八十才の二級障害者が超多忙です。  
定年後二十年、昔彼の国語教育で貰いた人間教育としての「独話活動」が全国にひろまって、他県の先生達が始終教室を訪れ、児童はそれが当り前の慣れようでした。ビデオカメラが回り続け、そのお陰で退職後に若手教員の指導を始めるに当り、実践授業風景をビデオで見ただけで出て来たのは、ありがたいことでした。今年の夏には九十回記念の発表会を迎えます。教え子達が駆け付けて、記念会などの度に場を盛り上げてくれて先生は幸せそうです。国語教育の最高峰に博報堂の「博報賞」があります。

独話教育で第十六回博報個人賞を頂いております。  
この書展が終わると八月に日本国語教育学会の全国大会八十回記念、東京で彼が公開授業をします。こんな例は稀なことでしょう。  
そんな教育と「書」という芸術活動。  
漢詩が読めない、草書が読めない。どこへ行ってもお師匠さんの手で書いたらしい作品展、「書」の魅力がないのだ。書道離れは当たり前。だから「こころを言葉に ことばを書け」。これが秋水会書展でのキャッチフレーズ。書に美を求めるのは当然ながら、自分の好きな言葉を詩文の中に探したり、自己を常に見つめ自己表現する。秋水会の目的は自己変革の生涯学習です。  
私とて、彼のそばで心を耕す独話教育を見つめていたから、おそれることなく自己流の下手な詩や文を恥ずかしげもなく、ど素人丸出しで楽しんでます。  
さて、三月半ば、三泊四日で箱根合宿へお供しました。日常から解放されて、一気にエッセイ集用の小作品



を作り上げる予定でした。ところが寒気がやってきて、三日間思いきり咳をして——。「書は風邪をひいただけでも良い字は書けぬ」。彼は夜遅くまで書き続け、どうにかこうにか三十点弱を仕上げました。でも結局翌日見なおして、家で書き直していました。これから半月で原稿を仕上げ、印刷に回します。原稿は誰が書く、彼が書く。読めない原稿を誰が清書する？ 回りを見回して？ 私しかない。  
四月十四日、五十三回目の結婚記念日を忘れずにデコレーションケーキを買って来てくれたっけ。  
そうそう、私の作品のことですが、「寛容」「女の一生」そんなテーマを抱えて自作詩文を推敲しています。  
昨年五月二十六日に、英国王立美術家協会の名誉会員として、BBC放送が作品五点を放映してくれました。その頃の作品を交えて「どうにかなるさ」の心境ですが、経師屋さん泣かせにならぬよう、皆さんに楽しんでいただけるよう精一杯筆に托します。  
乞うご期待。毎日お待ちしております。

◎初日(五月三十一日) 十時半～二十分程度

秋水オープンニングトーク  
「川の流れのように」

◎六月に入ると臨接の研修室で作品をみながら来場者が休めます。

# 私と文化協会

## 科学と文化をつなぐ

佐藤勝昭

文化協会とのつながり

私と本会のつながりは、麻生区美術家協会創立会員としてのお誘いを受けた昭和五十九年に遡ります。NHK技研を退職し東京農工大工学部の助教に就任した年です。以前から「地域に生きなければならぬ」と考えていた私は「返事でお誘いを受けました。美術家協会は、文化協会の加入団体なので、私も美術家協会員として「女優さんを描くデッサン会」や「区民スケッチ会」に指導者として協力してきま

した。私が麻生区文化協会の個人会員になったのは平成十八年です。美術家協会会員でもある松田洋子広報部長当時から、からむしの編集を手伝ってくれないかと依頼されたのがきっかけです。からむし四十二号(平成十九年三月発行)の編集後記には、「からむしの巻頭頁は、四十号から会員の描いたスケッチとそれにちなんだ文を掲載している。本号は、会員にあられたばかりの佐藤勝昭さんをお願いした。佐藤さんは美術工芸部と広報



部に所属。」とあります。

図は、からむし四十二号の巻頭頁です。絵は岡上山東光院の山門を横から描いたスケッチです。区民スケッチ会の際に描いたものです

文化協会のIT化

からむし四十二号が出た平成十九年は、東京農工大学副学長を退任しJST(科学技術振興機構)の「次世代デバイス」プロジェクトの研究総括になった年です。本会との係わりが私の仕事の節目に一致しているのは興味深いことです。

その年の文化協会総会に出席した私は、「文化協会はすべてが紙ベース、連絡も手紙かFAX。文化祭総合パンフもと電子化すれば安くなるはず。ホームページもない。IT化すべきではないか」と質問しました。

後で聞いた話ですが、年配の役員は、電子化に抵抗を感じる方が多く、とんでもない奴が文化協会に入ったなど困り顔だったそうです。

そんな私が本会の役員会の総務に指名されたのは平成二十年度総会でした。その年から、私は、本会のIT化に取り組みました。私のWEBサイトを駆使して勝手に麻生区文化協会のホームページを制作し今も運用しています。また、秋の文化祭の総合パンフレットを、電子的にデザインし、印刷所にネット入稿するやり方で大幅にコストを抑え、かつカラー化することができました。また、役員会の議事要旨総会議案書・七草粥チラシなど、着実にIT化を進めています。



アルテリツカ新ゆり美術展と私

平成二十年アルテリツカしんゆりが始まりましたが、音楽・演劇中心で美術はありません。そんな折、菅原会長の働きかけが実って、新百合21ホールを美術館仕様にして美術展示ができる運びになりました。

元会長の故杉本長治さんから、美術家協会と文化協会が平成二十二年春に美術展をやらないかとの電話がありました。私は、美術家協会事務局と文化協会の総務を務めていたので橋渡しとして両会に働きかけました。そして、第一回実行委員会が平成二十年十一月八日に開催され、私が委員長に選出され、名称を「新ゆりプレ芸術祭美術展」とすること、川崎市文化財団に共催申請をすること等が決まりました。

オーピングパーティーで来賓の寺尾川崎市文化財団理事長(当時)は、次回から会場費を全面的に財団が負担すると約束してくださいました。

平成二十二からは、正式にアルテリツカしんゆり芸術祭のプレイベントとして位置づけられ、「アルテリツカ新ゆり美術展」となり、今年で七回目を迎えました。

夏休み親子教室と私

夏休み親子教室は本会の重要なイベントの一つです。親子教室は毎年、十五〜二十教室が開かれますが、理科は多くありません。平成二十年は「測る」二十二年は「しぜん発見」の教室が開かれましたが、二十三年には理科がなかったのです。

二十二年三月三日から八日に開催されたこの美術展は千六百名を超えるお客様にご覧頂き大成功でした。会場費は、半額を美術家協会と文化協会が負担しました。



私は、親子教室校長(当時)の千坂さんから平成二十四年度の理科を担当するよう依頼されました。折しも、私は前年東日本大震災の年に「太陽電池のキホン」を出版していたので太陽電池をテーマにしてはとのことでした。応用物理学会で中高生向けの理科教室を担当した経験がありましたが、小学生を相手するのは初めてです。フェイスブック友達で科学コミュニケーターのNさん(多摩区在住)に相談したところ、プラモのソーラーキットを特

別価格で売って頂ける理科教材会社を紹介してくださいました。Nさんは教室のサポーターも引き受けてくださいました。子どもたちは熱心にソーラーカーを組み立て、屋外で太陽光を受けて走らせて遊びました。

三年間ソーラーカーをやりましたが、平成二十七年理科教材会社が倒産。それ以来JST科学コミュニケーションセンターのTさんの協力で「スマホ顕微鏡」に取り組んでいます。

このように私の担当する親子教室は科学コミュニケーションの仲間に支えられているのです。

### 地域交流のひろがり

川崎市総合文化団体連絡会(総文連)の会誌「文化かわさき」の編集委員や、かわさき市民芸術祭美術部門の委員を経験し、日頃顔を会わすことのない川崎南部中部の方々と同じ合うことができたのも、文化協会のおかげです。ただ、平成二十八年からは、市民芸術祭美術展の案内はがき、パンフレットの作成を担当するというおまけ付きですが。

文化協会主催のデッサン会には、黒川に稽古場がある劇団民藝の女優さんが舞白衣装でモデルになってくださっています。デッサン会終了後には、女優さんとお茶の会があります。そこ

で知り合った女優さんが、出演されるお芝居に、メールやフェイスブックを通じて誘ってくださいます。仕事帰りなどに時間を見つけて芝居小屋に出かけるのも楽しいものです。

### これからの文化協会

平成二十九年年度総会の後の懇親会で、昨年まで役員だった方が「私が利用している麻生市民交流館やまゆりは団塊世代の会員がどんどん増え、自発的な活動も盛んです。これに引き替え文化協会は入会者が多くありません。やはり、日頃集えるたまり場があるとなじみの違いでしょうか。」と話しておられたのが印象的です。

麻生区には、大学や研究所を経験した科学者、技術者で文化的素養をお持ちの方もたくさんお住まいです。そういう方々に加わって頂ければ「あたらしい風と創造」がさらに前進するでしょう。このためにはIT環境の整った独自の活動の拠点が欲しいものです。

## 麻生区文化協会 平成二十九年年度総会

平成二十九年四月十五日(土) 麻生市民館 大会議室

平成二十九年年度麻生区文化協会総会は、当日七〇余名の参加者をもって開催された。

吉田功副会長の開会のことばに始まり、次第に沿って滞りなく進められた。

まず、菅原会長挨拶では、この二年文化協会では「あたらしい風」を目指してさまざまな行事が行われたことへの感謝が述べられた。新年度は、創立三十周年記念事業でのキャッチフレーズ「あたらしい風と創造」も四年目に入るのだから一歩すすめたい。「あさお古風七草粥の会」は、麻生の正月の風物詩としてすっかり地域に定着した。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックには外国の方が見える訳で、日本を世界にアピールする良い機会。麻生区には七十一カ国、二三人の外国人が在住。

そこで、今後日本の伝統行事の七草粥に参加していただき、共に楽しんでもらうなど、これからの活動には、グローバルなパートナーシップが求められる時代であると熱く語られた。

表彰式では、麻生区文化祭奨励賞を白井爽風さんと橋本周さんが受賞された。

白井さんはアカデミー部に所属し本会の主要事業の一つである「俳句大会」

を果し、地域文化の創造と発展に貢献されていると評価を述べられた。また、市民館の大規模改修に伴い十一月から来年三月まで大ホールの使用ができないが、施設を長く使うための措置であるからと理解を求められた。

議事では、小田島寛さんが議長として選出され、事業報告、決算報告、会計監査などが満場致拍手をもって承認された。また、二十九年年度の事業計画及び予算案についても満場致で拍手をもって承認された。

最後に、横須賀朝子副会長より閉会のことばがあり、終了となった。

尚、総会の詳しい記録は総会報告として本誌と共に送付いたします。

(文責 総務)





# アルテリツカ新ゆり美術展二〇一七

岩田輝夫

今年もアルテリツカ新ゆり美術展が三月六日から十二日まで新百合21ホールで盛大に開催された。この美術展は麻生区美術家協会と麻生区文化協会、そして川崎市文化財団の強力な後押しにより三者共催で行われてきた。今回で八回目になるが、アルテリツカ新ゆり芸術祭のプレイベントとして行われるようになってから七回目を迎えた。

美術家協会からは新人の方二名が加わり二十三名、文化協会からは五分野の三十八名、そして、「舞台衣装を着けた民藝の女優さんを描くデッサン会」の参加者から十四名で総勢七十五名の方々の作品が出品された。

会場に入つてすぐに眼を引くのが、麻生いけばな協会十八名の先生方によ



る合作のいけばな「春詩雅人」(しゅんかみやびと)は、来場された多くの方を魅了し、写真に収めていた。



個人的な感想としては、昨年大怪我をされた書家の笠原秋水先生が回復され、出品された力強い書がとても印象的だった。また、愛犬の死の山本絢子先生が短期間の中で描



かれた朱鷺は遠くから見ても本物の朱鷺が飛び立つような感覚さえ覚えたことが、今でも



頭に残っている。

写真の展示では展示のテーマを決まず、それぞれの観点で撮影された作品は、一人ひとりの個性がとても強く感じられる素晴らしい展示であった。陶芸は事情で三名の出品になったが、やはりここでもそれぞれの個性がよく出ている展示であった。



「民藝の女優さんを描くデッサン会」の作品では、同じ女優さんを描いてもこのように違う素敵な作品ができあがるものなんだということが感じられ、やはり一人ひとりの個性が出るところが美術のよさなのかなと感じた。



さて、隣の会場の美術家協会の先生方の大作は毎年会場に入った途端、圧倒されてしまうが、今年も同じであった。どの作品も作者の個性が強く出ている素晴らしい作品で、作者名を見なくてもどの先生の作品かが分かるようになってきた。今年にはギャラリートークが無かったが、作品やキヤプションを通して作者の思いがよく伝わってきた。

この美術展とは直接関係のないことだが、二昨年の夏、台風による大雨で茨城県の常総市を流れる鬼怒川が決壊し、常総市の多くの家屋が流されたり床上浸水してしまつた。その中で、あるお寺さんでは浸水した一部の建物を取り壊して建て替えた。

この建て替えたお寺に、以前この美術展に出品した麻生区美術家協会の尾田久美子先生の絵が飾られることになった。お寺の近くには鬼怒川の支流があり、この川沿いにはたくさん桜の木が植えられている。

お寺からこの桜がよく見えることから、尾田先生の桜の絵になったそう。今度、機会を見つけてこのお寺さんを訪れてみたいと思っている。



# 雑学教室「古代ギリシヤ・パルテノン神殿の彫刻」

眼差しの交錯・心の交流を拝聴して

三月四日(土) 東京学芸大学名誉教授 水田 徹先生

山室 茂樹

先生のお話はパルテノン神殿に掲げられている、または掲げられていた数々の神像または壁画に係るもので、副題は「交錯する眼差し・心の交流」であり、描かれている神々の眼差し、または神々と動物たちの眼差しが不思議にも交錯しているのが多いことに触れ、それがもたらす心の交流について語ったのですが、先生のお話はあまりにも微に入り細を窺ったものであり、神話や絵画の知識に乏しい私にはよく理解できない点もありましたが、なぜか心の奥底にまで染み込んでくるようなお話しだったので、先生のお話とはやや異なるかもしれませんが、私流に拡大解釈して皆様にお届けしたいと思えます。

## ○ギリシヤという国

ギリシヤはヨーロッパの南東にある地中海に面した小国ですがその歴史は古く、紀元前八世紀から九世紀にはアテネ、スパルタなど多くの都市国家が成立、前五世紀には黄金期を迎えた。その後ローマ帝国の支配下におかれ、またトルコに征服される等の激動の歴史をもつ。しかし古代ギリシヤの生んだ神話、美術等はヨーロッパ文明に多大な影響を与えた。ま

た紀元前八世紀に始った古代オリンピックは後に現在のオリンピックとなり、また紀元前五世紀のマラトンの戦いに因むといわれるマラソンも忘れてはならないだろう。

## ○一神論と多神論

神話に登場する神は大別して一神論と多神論がある。一神論の代表はキリスト教の聖書に登場するイスラエル民族の神エホバやイスラム教の聖典コーランに登場する神アッラーである。一神論の神はそれこそ全知全能の神であり、人間に自信と希望を与え、励ましたり、慰めたり力をもっている。一方で絶対的権力をもつて人間にきびしく命令を下します。従つて神は超絶的な威厳にみちたものとして、そこに人間らしさを感じることは出来ません。

それに対してギリシヤ神話に登場するのは多くの神々で、それらの神は一神論の神に比べ威厳と権威はありませんが、人間らしい感情をもつ楽しい神々となつていきます。ここにギリシヤ神話が世界の人々に愛されている秘密があるのです。

## ○ギリシヤの神々が決まるまで

現在のギリシヤ神話の神々の王は

ゼウスですが、それ以前の神々の王者は巨神クロノスであり、その兄弟十二人と共にギリシヤを治めていたといわれています。しかしクロノスのあまりの横暴にたまにかねたクロノスの息子のゼウスがその兄弟たちと共にクロノスに戦いをいどみ、まる十年に及ぶ激しい戦いの後にゼウスが勝利を納め、ゼウスが神々の王となり、二人の兄と世界を分け合うことになったのだそうです。

## ○オリンポスの十二の神

神々の王となつたゼウスはオリンポスの山上に宮殿をつくり、他の神々と共にそこを住まいとしました。神々の中ではゼウス、その妻ヘラ、アポロン、アテナ、などの十二の神が有力で、オリンポスの十二神と呼ばれます。そのうちのゼウス、ポセイドン、ハデス、アテナの四神について説明します。

### 〈ゼウス〉

「最も輝かしく、最も偉大な雷神」とうたわれ、天の支配者。正義を愛し、うそつきは許さず、しかし、わがままで浮気者で幾人も愛人をつくり、その一人にヨーロッパがいた。このヨーロッパからヨーロッパの名がおこつたといわれている。

### 〈ポセイドン〉

ゼウスの兄で海の王。海の底の宮殿に住んでいる。また、地震を起こす神、地下の水や泉の支配者とされる。この神はいつも三叉の槍を持つている。

### 〈ハデス〉

地下の死者の国の王。陰気な顔をしたこわい神ですが悪い神ではない。死の国がないと人間は困つてしまいますから。

### 〈アテナ〉

ゼウスの娘で、すっかり成人して鎧兜をつけた姿で父親の頭から飛び出して来たといわれる。アテナはポセイドンとのギリシヤ第二の都市アテネの領有権争いでオリブの木を植えて勝利し、アテネの守り神としてアクロポリスのパルテノン神殿にまつられることになった。長さ百六十メートルに及ぶ「パンアテナイア祭」の浮彫は女神アテナに神衣を捧げる儀式の行列を描いたものであるが、ここに描かれている人物、動物の眼差しがそれぞれ関係を表しているとか。

パルテノン神殿には建設当初、高さ十二メートルもの女神アテナの素晴らしい彫像が置かれていたという。今、神殿は柱を残すのみとなつていますが、世界中の人々がこの建物の廃墟状態を見慣れていることもあり、その復元が見送られている。

## ○なぜギリシヤ神話は愛されるのか

最大の理由はギリシヤの神々は

美しい人間の姿に描かれていることです。これは実は大変なことなのです。神を人間の姿で現すことは、神の威厳を損なうことになるのですから。

そんな人間の姿をした神々は考え方や行動もすこぶる人間的で、恋をし、嫉妬もし、享乐的で冒険好きです。そんな神々にまつわる豊かな神話の人々の心を捉えるのです。またそれらの話の中には、ギリシヤ民族が長い間に学んできた知恵や理想や夢が結晶しているのです。神話を学ぶことは即ち、人間を学ぶことに直結しているから多くの人々に愛されているのでしょう。



## 第十四回

### あさお古風

### 七草粥の会

今年も晴天のもと、千人を超える方々に参加いただきました。七草粥やカルタとりは日本の正月を味わうとても良い機会と、とらえてくださる方々が多いということですね。また当日、多くの方々が寄せてくださった募金四八三六円を、「読売光と愛の事業団」(こども支援寄金)に送金させていただきました。皆様のご協力に感謝します。

(横須賀)

# 会員の活躍

## 「第三回あさお写遊会 写真展」

小田島 紀美

新年早々の一月六日～十二日の期間、麻生文化センター市民ギャラリーにて文化協会写真部のメンバーを中心に写真展を開催しました。写真部所属の出品者を紹介します。

小田島紀美(北海道の景色を中心に)・小田島寛(各地の橋梁にスポットを当てて)・千坂隆夫(秋の南アルプス)・スパー林道の秋景色)・森妙子(イギリス ロンドン近郊風景)・山本彬夫(日本民家園・河口湖等の心象風景)(五十音順)

撮影してきた写真の発表機会を広げたいというメンバーの思いで始めて今回で三回目になります。ギャラリーの使用は毎回抽選で決まるため定期的に会期を決めることができないのですが、今年は、新年幕開けの会期となり



ました。

七日には外の広場にて

「あさお古風七草粥の会」もあり、参加された方がギャラリーにも足を運んでくださり多数の来場者で大いに賑わいました。有り難かったです。



一人三点～四点の作品が展示できるためそれぞれの個性を発揮できることは喜びです。搬入時には作品の自評を合せて互いの思いや工夫などを学び合うと共に、来場者への解説や質問に役立てました。

寒い時期の当番は大変ですが会場に来ていただいた方と写真をもとに様々なトークができることは展覧会の楽しみです。次回、四回目の「あさお写遊会」にも是非いらしてください。

## 「岩田ご夫妻の二人展」

一月二十八日～二月五日まで岩田

ご夫妻の「小さな作品展」が開かれました。タウンニュースに「夫婦で陶器と布人形に熱中 王禅寺西在住の岩田さん夫妻」という記事が出ましたからご覧になられた方が多かったのではないのでしょうか。私も展覧会のお誘いを頂き岩田さんのご自宅を訪問させていただきました。

自宅で展覧会をどのように開催するのか想像できず、少々道に迷い

ながら到着すると、奥様の温かい笑顔が迎えてくださいました。庭に建てられた陶芸小屋から輝夫さんも顔を出して迎えてくださいました。玄関前には輝夫さんの作品が、玄関の中では恵美子さんの大きな雛人形が来訪者を導き入れ、二階の間と書斎が全てギャラリーになっていました。輝夫さんの初期の作品から最近の見覚えのある作品まで二百点、恵美子さんは、様々な布や和紙をアイデア豊かに人形に作り上げ



輝夫さんの作品



恵美子さんの作品

た九十点の作品が空間を工夫して展示されていました。来訪者が引きも切らず訪れ、美味しいコーヒーをご馳走になりながら美しい物の中に身を置いていると初対面の者同士でも会話が弾みました。まるで「王禅寺サロン」です。来訪者は、好きな陶器を選び戴くことができました。私は、戴いた大振りの湯飲みを愛用しています。準備が大変だと話されていましたが、作品制作や保管の上部屋の片づけも想像すると二年に一回の開催も領けます。再来年の開催が今から待ち遠しいです。(小田島 紀美)

## 文化協会のこれから

六月四日(日)

デッサン会 舞台衣装の女優を描こう (麻生市民館大会議室)

七月二十七日(木)～八月二十日(日)

夏休み親子教室(麻生市民館・他)

八月二十九日(火)～九月十二日(火)

俳句講座(大会議室)

九月十三日(土祝)～十月二十五日(水)

麻生区文化祭

九月二十三日(土祝)

邦舞邦楽文化サロン

九月二十四日(日)

麻生フィル吟舞吟詠

十月二十二日(日)

洋舞俳句大会

十月二十日(金)～二十五日(水)

美術工芸展

## 編集後記

確かに、最近の世の中の進化は早すぎる。年をとることに、知らないことや理解できないことが増えてきたと言われている。

散歩に出た並木道は、満開の桜が花曇りの午後の空に、煙のように溶け込み人をつとりさせるような美しさだった。そして、その数本の桜の太木の根元には、初々しくもたくましいひこばえが出ていた。

二〇二〇年のオリンピックの年を目指し色々動き始めている。文化協会にも新しい風が吹き始めた。二〇二〇年へ向けての会長の抱負は前向きで、大きな夢がある。心地よい風を背におされた気がした。グローバル化を目指す文化協会にどのような出会いや発見が待っているのだろうか。

(関森)

編集委員

岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報

からむし 第六十二号

平成二十九年五月一日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会広報部

川崎市麻生区万福寺一五一二

麻生文化センター内

〇四四一九五一―三三〇〇

印刷 (株) エリアブレイン